
かつて恋した君に

籠原

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かつて恋した君に

【Nコード】

N3495Q

【作者名】

籠原

【あらすじ】

ある世界、ある時代。かつての女勇者の姿はすでに無く、己の孫と子供達を見て、優しく微笑む老女がそこにいた。

ある世界、ある時代。かつての魔王の姿はそのままに、己のものにならなかつた女の面影を宿すうら若い娘を見て、氷の笑みを浮かべる狂人がそこにいた。

彼は世界に愛された清らかな娘を人質に、世界に言う。

「ならばぼくのナターシャを寄越せ。いや、ナターシャの屍をぼく

に寄越せ」

世界は娘を助けるためなら、老女を相手にしてもその手を緩めな
かった。

ヒロインはババアとロリの二人になります

登場人物紹介

【ナターシャ（69）】

白髪のひつつめお団子髪に灰色の瞳の、穏やかな老婆。

かつては勇者と呼ばれていた。

左手に聖痕がある。

【アーマントウルド（13）】

亜麻色の長い髪に碧の瞳の、さっぱりした顔立ちの少女。

ナターシャの孫娘で、極度の男嫌いなシスター。

右手に聖痕がある。

【ベネット王子（29）】

赤みがかった金髪に青灰色の瞳を持った、輝かんばかりの美青年。

王国イバライドの王子で、目を病んでいたが……。

アーマントウルドに執着する。

【ヒュー（32）】

古臭い巻き毛のカツラを被ったイバライドの宰相。

毒舌で策士で男やもめ。

【魔王】

かつてナターシャが退治した、召喚術を操るアサクランドの王。

氷王とも呼ばれる。

【ドナルドノドン（33）】

ナターシャの息子でアーマントウルドの父。スタンリー士爵。ア

ビゲイルの婿。

力の強さが自慢だが、どこか抜けている。

【アビゲイルノアビー（30）】

ドナルドの妻でアーマントウルドの母。

貴族らしからぬ天真爛漫な性格だが、家事が出来ない。

【ボイリー・ホーゼント（36）】

イバライド王国第一師団師団長。輝ける熱血騎士。

【トウイニンギン】

外面のいい若者。リリーアの親戚。

【リリーア】

かつてのナターシャの旅の仲間の初老女性。仲は決して良くない。

以下随時更新

01 かつて子供だった父親（前書き）

見切り発車なのでどこかで辻褄が合わない箇所が出る恐れがあります

遅筆です

投稿した小説を予告なく修正する場合があります

01 かつて子供だった父親

霜も晴れぬ凍てつく早朝。歳のせいか朝早く目覚めた老女は、もう習慣となつている頭頂部は量の薄い髪を一つまとめの団子にする作業をし、顔も齒も磨かないままに自慢の庭に繰り出した。

かつては美しい亜麻色の波をうたせていた髪は毛先を残して白銀に変わり、昨日降った雪と同じ色合いに鈍く輝いている。

老女の名はナターシャ・エイデン。一ヶ月後には七十になる。

一年前に亡くなった、街の教会の司祭を勤めていた夫は、何より庭弄りが好きだった。芝生は冬でも青々と繁り、今なお形良く刈られた生け垣、薔薇のアーチ、雪が溶け込んだ氷かけた池。

かつてこれらは全て夫が世話して形作られたものであったが、今ではこうして朝早く、彼女が手入れを施し、美しい体裁を保っている。

若かりし頃にはこうした身近な幸せは理解できなかつたけれど、この歳になつて喜びを見いだせるようになってきた。

そもそも、昔は庭弄りなどを自らやるような立場には無かつた彼女だから、それは自然で当然のことだつたけれど。

若い頃からこんな地味な趣味を持つていた夫、ジエラードは堅物で、かつ臆病で内気で、昔から教会からも家からも飛び出したくないという願望のある出不精であつた。

枝切り鋏でこの季節にも元気に伸びる植物達を揃える。六十九の彼女であるが、その作業は全く苦にならない。

彼女は秋からずいぶんたくさん咲き続けていた冬薔薇の中にまた新たな蕾を見つけ、あらまあと言いながら、しばし考える。

「ごめんなさいねえ」

蕾の代わりに、既に咲き誇っている花を一輪落とした。

薔薇が大輪を咲かせるには、蕾の数を一定に制御しなければならぬ。多すぎるとは小ぶりの薔薇しか咲かせない。冬ならば尚更だ。

ナターシャは古い花のためにこの寒い中芽を出した蕾を切るのが忍びなく、古いほうを犠牲にした。

時代はいつでも若い者達のものだ。

落とした薔薇を棘を避けて拾い、匂いを嗅ぐ。

なんて良い香りでしょう。

古い薔薇であっても、この時期だ。水に挿せば美しく、永らく咲き続けるだろう。

時代は若い者のものといえど、すぐに衰えるわけではない。

切り落とした薔薇は、一際大輪の白薔薇だった。

冬の日が昇り、老女は家に戻り朝食の仕度をする。

バタバタと階段を降りる音がした。

「あ、お義母さん、ご飯なら私が……」

義娘のアビーだ。

「いいえ、いいのよ。私のいえですからね。あなたでは勝手が分からないでしょう」

「でもお義母さまにやらせて私だけというわけには」

「……じゃあ、可愛い孫達を起こしてきてちょうだいな。私つたらあの天使のような寝顔を見ると起こせなくて。つつい甘やかしてしまふものだから」

「はい！」

アビー、アビゲイルはナターシャにとっていい義娘だった。とても元気で笑顔が絶えない。彼女はナターシャの家柄よりもずっといい家柄の娘で、ナターシャの息子は彼女の家の婿養子となっている。だから勿論、一緒には暮らしていない。しかしたまに息子が気を

つかってこうして実家に家族総出で泊まりに来てくれるのだ。

息子の家には使用人がいて、なんでもしてくれするという。義娘の料理の不出来さを一度見たことのあるナターシャとしては、気持ちには有り難いけれど、出来ればその親切はお断りしたい。

天使のような孫達につい甘いというのも事実であるし、嘘は言っていない。

息子の家の食卓事情は知り得ないが、うちはうち、よそはよそ、というスタンスで料理を作る。

ベーコンを鍋底にたっぷり敷き、脂が滲み出たところでたまごを五つ投入する。弱火にして蓋を閉じ、一方で人参玉ねぎじゃがいもグリーンピース、骨付き鶏を沸騰した子鍋に入れ、パンを切り落として焼いて、を同時進行で行う。

三分たてば、たまごはふつふつ、人参にも火が通り、もうみんな出来上がり。

それらを皿に盛る前にお湯を沸かして、用意が出来たらダイニングへ。

眠たげな眼の孫娘、孫息子。ついでにテーブルに突っ伏している出来ない息子の頭を押し退け、パンのバスケットを置く。

続いてベーコンエッグを一人づつ、スープ皿は沸いたお湯とともに持ってきて、その次にスープ鍋とティーポットを運ぶ。

既にティーカップと茶葉の用意だけは義娘がやってくれていたの
で、蒸らして次いで、の作業が終われば、祈りを捧げて、待ちきれ
ない様子の孫達がベーコンエッグにかぶりつく。

「こら、行儀の悪い！ 教育係に教わったでしょ！」
「アビーの目くじらには覚えがある。」

昔に同じようなことを結婚前の（・・・）息子に散々言ったが、
おやまあ。今ではなんとか形になっているようだ。

「いいわよアビー。今日くらい無礼講よ。ねえアニー？ おばあち
やんのゴハンはおいしいかい？」

「ほいひい！」

卵を半ば噉りながら食べる孫娘の無邪気なこと。

「でもね、そんな焦って食べるとね、こおんなおデブちゃんになっちゃうのよ？ ほら、教育係の男の人、食べるのすくくはやいでしよう」

と言つと、ピタッ！ とアニーとマラカイの動きが止まった。

「ふふふ。でもゆっくり食べれば、パパとママみたいな体のままおつきくなれるわよ。ほら、二人とも食べるのが遅いでしよう」

そう言えば、ちらちらと両親を見ながら同じペースでスプーンを口に運び出す孫達に、思わずクスクスと微笑んでしまうナターシャ。

「やっぱり血ねえ。ねえドナルド」

「……やめてくれよ」

暗に結婚する前の息子の姿とそっくりだと言ったら、息子ときたらむっつりむくれてしまった。

「あら、どうしたのあなた」

父親に似て無口で恥ずかしがりやの優しい息子は、妻の追求に耐えられそうもない。

純情がこらうじて新婚気分のまま、妻の前では格好つけて亭主関白を気取りたいんだよ母さん！ と夫婦喧嘩して追い出された時に叫んでいた息子が少々不憫になり、ナターシャは助け船を出した。

「そついえば、アーマントウルドは元気そう？ 便りくらいそつちには来ているんでしょうね」

顔を背けていた息子が、眉根を寄せて振り向いた。

助け船にすがり付いたというのにはとても険しすぎる顔で。

「なんだ、聞いてないのかい」

「何を？」

「俺はてつきり、知っててあえて言わないのかと」

息子と義娘は、何やら深刻そうな顔つきになっていた。孫達は相も変わらずゆっくり朝ごはんを咀嚼して、将来の肥満に備えている。

ということは 何かしらの大人の事情が生まれたのだらう、アーマントウルドに。

「……。あの子はお義母さんと似たような痣が右手にあったでしょう」

アビーが重々しく言った。

息子は、ああ哀想なアーマントウルド、とアビーの言葉を引き継いだ。

「あの子はその手のせいで、王子に気に入られてしまったんだ」

「……気に入られたって」

ナターシャが鸚鵡返しに聞き返したのは、本当に何も分からないが故だった。王子と単に言えば、このイバライド王国のベネット王子を指す。

大人の事情。確かベネット王子は充分過ぎるほど大人である。歳は確か もうすぐ三十路になられる方であった。それがどう関係するところなのか。

「俺たちも宮仕えでは無いから、人から伝え聞いた話だけど、アーマントウルドの教会に、一週間前王子が慰問に訪れたらしく、あの子は男嫌いといっても、可哀想な人を見ると放っておけない質だろう。だから」

一週間前。

恵まれない子羊達のための孤児院をかねたファインディラー教会に、日頃の子供達の行いを讃えるという名目で、王室からベネット王子が慰問に訪れた。

昔は素行が悪く評判の悪かった王子だが、数年前から目を患い、以来教会への慰問や近隣諸国との関係を良好にする手を惜しまず行っていることから、今ではかつての評判はなんのそのという具合に市民に慕われている王族となった。

そのファインディラー教会には、入ってまだ数ヶ月の修女、シスター・アーマントウルドがいた。

シスター・アーマントウルドは王子が深く頭を垂れ、「主よ、主よ、私へのこの試練はいつ終わるのですか」と告白していたのを目

にし、憐れに思っただろうか頭を上げるよう、その手を王子の頭に添えて促した。

するとどうしたとか、王子の瞼に修女の手が触れた途端、王子の盲たはずの瞳には慈悲深いシスター・アーマントウルドの顔が鮮明に映っていた。

シスター・アーマントウルドは聖痕を持ったその手で、王子の目を治すという奇跡を起こしたのだ。

「治してしまつて……。何がどうまずいと言つたの」

「そのせいであの子は今、聖女として讃えられてるんだよ」

「人の役に立てるのなら、あの子の望み通りじゃないの」

「あの父さんに似て引つ込み思案な子が聖女だなんて持ち上げられているんだよ。……それだけじゃない。王子から、アーマントウルドは求婚を受けたんだ」

ナターシャはあんぐり口が開いた。

分別のあると評判の王子が、十三歳の修女に求婚??

「俺にも真偽は分からない。噂が立つて以来、アーマントウルドからは便りが一通も来ないんだ。でももし本当だとしたら、俺にはとても断りきれない、だつて断つたら……。なあ母さん。母さんは本当に知らなかったのかい？ こつちにこそ便りが来てたんじゃないのかい、俺は」

再び孫達に目を移すと、カチャンと音を立て、スプーンを置いて、無垢な瞳で両親を見ていた。

かつてはあんな風は無邪気にご飯を食べていた子供が、今は自分の娘の行く末を案じて、やり場の無い涙を流している。

息子は、「たまの休みだから」などと言ってぎこちなく笑つてこの家に訪れたのだ。それなのに。

その実彼はこのやりきれない思いを隠して笑っていたのだ。

「だから、なあ母さん。母さんなら」

「だめよ」

「王室だからって、もし本当ならアーマントウルドがあんまりじゃないか！」

「……。今日はいつもくる日より一週間早かったね」

「ああ」

「そのために来たのかい？」

義娘までが駆け寄って、

「私だってお義母さんに頼むのはお門違いだって解ってるけど」とナターシャにすがる。

けれど私にはもう何もできない。

左手を見つめ、固く握った。

「こんなおばあちゃんに、なにが出来るというの」

「もしかしたら母さんだって奇跡を起こせるかもしれないじゃないか」

「あなたは奇跡を勘違いしているわ」

アーマントウルドにはアーマントウルドの与えられた役目があり、ナターシャにはそれがどんなものかは分からない。ただ、ナターシャの役目は、遙か昔々に終わっているのだ。

「奇跡というのは、悪いものをいいように変えることしかできないものなのよ」

02 かつて哀れな子羊だった王子

アーマントウルド・オーデン、スタンリー士爵の長女である彼女は、四ヶ月前に十三歳の誕生日を迎えた。

教名はアーマントウルド。元の名と同じものを彼女はつけた。なぜならその名は敬愛した祖父により名付けられたものであったからだ。

彼女は今、珍しく一人いない教会にいる。

我らが主の娘が偶像、その前で膝をつき、手を組み、瞼を閉じている。

神よ。

イバライドの讃える神は一人。地上に降りた人の子にして神の娘がその神の存在を広めた。

その神の娘はアーマントウルドと言った。

だから祖父がこの名をつけた時、人はそれを不敬と言った。だが名付けられた所以を聞いた途端、誰もが閉口した。

彼女の右手には、血にしか見えない痣があり、つまりは聖痕を持つて生まれた司祭の孫娘。そしてなにより、あの聖痕を持って魔王を封じた勇者の孫でもある。

この聖痕を持った子にこれ以上相応しい名前は無いだろう。

「神よ……」

彼女は震える声で言った。

「私は彼の不幸を救いました。しかしそれは間違っていたのですか？ あの試練を救ってはならなかったから、私に罰を与えたのですか？」

試練という名の罰を。

彼女は神に、そして胸に杖を刺された十字架の、己と同じ名前を持つ神の娘の偶像に問う。

答えは、無い。

バン！

「……はあ」

代わりに教会の門扉が静かなこの場にそぐわない勢いで叩かれ開け放たれたのに、顔には出さないもののただただアーマントウルドは嘆いた。

「シスター・アーマントウルド！！ここにいたのか！！」

「……どうなされました、王子」

つかつかと駆け寄ってくるのは、この国のただ一人の王子であった。

赤みがかった金髪は王子の冠を拝するのに相応しい輝きで、五年間ひたと閉ざされていた瞳はノーブルな混じり気のない青灰色に、ところどころ高貴な目映い星を散らしている。桃色の肌はとても今年に三十になる男には見えない、人ならざる美しさ。

しかし服装は王族らしからぬものであった。

「……。どうなされました」

「ん？ 聞いてくれるかシスター・アーマントウルド！」

単に「シスター」と呼べば良かるうに、とアーマントウルドは辟易する。

アーマントウルドは元の名もアーマントウルドであることを彼は知っている。知っているからいちいち「シスター・アーマントウルド」とアーマントウルドを略さず呼ぶのだ。

「昨日の寄付はシスター・アーマントウルドは喜ばれなかったらう」

「お気持ちはありがたいですが……」

一週間前から、彼は慰問と称して毎日、毎時この教会に来ていた。

昨日などはその手にドレス　アーマントウルードが着るために誂えたようなサイズの　を寄付として五十着も携えて。

十三歳の子供に下心を持って接するなど！　と司祭は言い、教会の子らみんなのための寄付だと言う王子の方便には耳を貸さずつかえしてくれたから良かったのだが、今日のこれは、何だ。

「私の身なりも食事も、国民の血税によってなりたっている」
「そうでございますね」

「だから昨日は恵まれない子らに私達の恵まれた生活の一旦を与え、希望を見せようとしたのだが」

「女兒限定とは嘆かわしく思います。神を慕う人は常に平等であるべきで、何より幸せを少し垣間見せるなど余計に哀れに思いませんか」

「昨日も同じようなことを司祭に言われた。私にはどうもそういう心の機微が分からぬようだ」

「努力を怠らなければ、精神の成熟は誰しも成し得るものです」

「だからそのために、反対に市井の恵まれなさを一瞬だけ試してみればと思ったのだ」

「それで、その格好なのだと」

市井というかなんというか、アーマントウルードはその服に見覚えがあった。

「どこでお買い求めになったのです」

「この施設のグレゴリーから買ったんだ」

「はあ。とまたため息をついた。」

グレゴリーはこの教会でも最年長の十八歳、背丈は王子と同じくらいで、もうとうに一人立ちか修士になるかを決めるべき歳なのに一向に寝て暮らしている厄介者だった。

「教会に預けられる寄付は教会のみんなのものです。個人だけに利益を与える行動は以後謹んでくださいませ」

「すまないな。しかしこのおかげで人の心の機微が多少分かったぞ。聞いてくれるか」

教会に勤める者は、告白するものの訴えを無視することは出来ない筈がある。

「、、どうぞ」

「私はこう感じたのだが、おかしいのだろうか」

「どのような」

「一瞬ならば我慢できないこともないが、これが、永遠ともなると私は神の目の前でも、この身をかき消したくなるのだ」

アーマントワールドは静かに彼の伏せた目を見た。

「……」

「正常か？」

「ええ、正常でございます。人はそういうものですから」

十三歳の子供に人の心のあり方を問い、疑いも軽んじもせず聞く三十歳の子供（おとこ）。

やはり私は間違っていたのだろうか。

ついこの間までは、試練を嘆き、神の慈悲を請おうという思いだけで、優しさを得ようとしていた人。

あのままでいたらこの人は建前では無く、それを当たり前だと感じ、王族に必要な種類の優しさや憐れみを手にしていたのかもしれない。

私は願ってしまったのだ。神の慈悲を願うのに必死なこの人に、神ももう彼をお許してください、と。

「王子、市井の者の気持ちを理解したいのなら、いまのお気持ちを逆さにしてお考えください」

「さかさ？」

「王子は仰られました。一瞬の貧しさは我慢できるが、永遠ならば耐えられない、と」

「ああ」

「貧しいものは逆なのです。一瞬の富を垣間見ると、永遠さえも願う」

一呼吸置いて、アーマントワールドは王子から目をそらし、立ち

去ろうとした。

なのに王子の長い腕が進む道を塞いだものだから、叶わなかった。「どういうことだ？ 分からない。良いことではないか。希望を持って」

はあ。

アーマントウルードは三回目のため息をついた。

「……この施設の子達には、なるべく教育を受けさせています。しかし出地の関係で、雇用先は限られているのです。一番良い解決策は、教会関係者になることです」

私のように、しかし私のようにはなれません。

アーマントウルードは恵まれない子らを思い、抱いてはいけない王族への憎悪を心の内にたぎらせた。

「私の出地は恵まれています。聖痕もある。だからこの歳でこうしていられるのです。しかし子らはそうではない、何の後ろ楯も無い元より宗教関係者など、限られた人しか祭祀になれず、富める者は叩かれるでしょう。それなのに貴方ときました」

「私がどうしたと」

「……貴方ときましたら、あんな王公貴族のようなドレスを！ しかも限られた体型の者しか着れないような者を与えようとして、過剰な欲を与えようとした」

「私はつかの間の幸せをと」

「つかの間！ そうつかの間！ 永遠は訪れないのです。貴方は王公の一員だ。このことを解っていないがなぜ彼らの幸せを永遠のものになさらない。その努力をしない。過剰な欲は渦を巻き、それを着れない者の嫉妬をあおぐでしょう。なんのために我々修士達が判を押したように同じ服装なのか？ 平等であるためです。この教会だけは誰もが平等であるべきだからです（……………）」

「私はお前が好きだ」

突然の告白に、アーマントウルードは猛攻を止めた。

アーマントウルドは猛攻を悪いことと思わない。形式的に敬うけれど、神の下にある人の子は、全て平等であるべきという信条がある。悪態さえも平等につくべきなのだ。

しかし悪態は誰しも気分を害するものだろう。
なのにどうしてこの男は、私の肩を掴む？

「嘘なのだ。この施設の者が富めようと富めまいと、私にとっては蟻のようなもの」

「はなっ……」

「私はお前と結婚したい、シスター……いや、アーマントウルド！ 既にお前が聖女だという地盤は出来た。教会を離れても誰もが
お前を聖なる娘とは疑わない！」

どうして彼の人は、こんなにも私の言葉を理解しないのだろう。

アーマントウルドには、この男が別の生き物にすら見えた。ああ、でもこれは、生来の理不尽な男嫌いのためか。男の顔が、渦を書いて崩れていく。

「私はお前に一瞬の富みを感じさせたかったのだ。お前だけだ。そして願わくば、永遠に富みを請うようにさせたかったのだ。さすれば私の隣ほど、富みに近い場所は無いからな」

「お離してください、本来理智のある人よ」

「いいや離さぬ。アーマントウルドよ、お前は教会を辞める。」

否、お前は辞める。私が教会に命じよう」

「何を！」

「冗談では無い。」

この男は何をほざくのか。また言っているのか？ 目を治した途端に年端もいかぬ子供に告げた、あの世迷い事を。

「私たちは結婚するべきだ。お前は正妃アーマントウルドとなるに相応しい女だ。そうだろう？ お前より優れた女など、神の子アーマントウルドしかいないのだから」

何の疑いもなく、頷くよう促す王子ベネットの顔は、無垢な支配者の顔で。

ああ、かつては。

かつてはただの哀れな羊の一体であったのに。

03 かつてサディズム溢れる少女のように見えたどこその某

イバライドのパレーズ大公ベネット王子は、その昼、非常に上機嫌であった。

昨日の雪が昼の光で完全に融けきり、また雲一つ無い空の空気を肺一杯に吸い込めたことが一つ。

「フン、フフフン、フン、フーンッ！」

調子っぱずれな国歌さえ鼻で鳴らし、王宮から広大な庭を横切つて城に入り、宰相ヒューがいるだろう部屋の戸をノックした。

「ヒュー！ おいヒューよ！ 見たかこれを！」

古臭い巻き毛のカツラを被った宰相、ヒュー・オーガスチエスターは、はあっ？ と声を上げかけるのをなんとか押さえた。

今の声は王子に他ならず、本来ならこちらから王子の住まいに行くことはあつても、我が城 我が物顔で仕事ができる自分の範囲内、という意味においての城だ、他意は無い に来られることなど滅多に無い。

というか宰相として着任して丸一年、今までこれは皆無であった。嫌がらせか？ 絶対嫌がらせだ。王は直々に来られることもあるとこのにああ嘆かわしい。

第一見たかと言われても、部屋の外で待機しては何の話なのか検討もつかない。

ヒューは溢れかえる書類を踏み越え、飛び越え、優雅な着地を決め、扉の鍵を開けた。

ヒューが扉を開けずとも、ずいずい中に入ってくる、金髪頭が輝かしい我が主人。

「ヒューよ！ 私は今日、すごぶる気分がいいぞ！」

「ああ殿下ご機嫌麗しく何が何だかさっぱりでございますが何よりでございます。して、何が」

韻は踏んでいるようで礼節のほうは弁えているのかいないのか、髭の無いさっぱりした顔つきの子三十二歳男やもめは、王族に対して不遜ともとれない言動である。

まあ彼は代々宰相の家柄なので（王族の近親者は誰一人いないが）、有り体に言えば礼節を弁えなければならないのはこの主人が王くらしいものだから問題は無い。

最も、長年のつきあいのこの主人といえば、美しく利発な女兒が、自分の隣で叱つたり怒鳴つたりしてくれて、またそれが自分好みに育っていくさまをまじまじ見ていたいぞ！ といった願望を、ご幼少のみぎりからお持ちであった、つまるところヒューの最も唾を吐きかけた種別の人間なので、ついつい礼節が抜けることもまた事実。ヒュー本人としては、ちゃんと彼に礼節を尽くしたいと思っっているのだが……。

従って不遜が故にはない。

「ほら、いいからこれを見るが良い！」

「そんなふうにはひけらかさなくても見ますよ殿下」

差し出された紙は、遠視のヒューには近すぎて読み辛いのだが、そんなもの、自らの体を遠ざければ済む。
だが。

「申し訳ありませんが殿下、少し遠ざかって紙を下げて頂けますか、読みにくいので」

「分かった、これでいいか？」

「ありがとうございます。結構でございます」

もう一度言うが彼のこれは、不遜が故にはない。

持って生まれた性格だ。

「あー、これは、巷で配られるビラ、というものでございますね。

最近市井の者共もまあ頑張っ楽しんで模索しているようであり

ますね」

挿し絵すら無い細かい字のビラ紙を読むのはなかなか困難である。主人の前で胸をのけぞらせるといふ不遜なポーズになっているが、まあ最近の主人はあのとおりなので以下略。

「えーピヤフ伯爵婦人まさかの執事とただれた関係主人の飼馬の馬上であれやそれやおおつとこれは……おおつ……」

「違う。その裏だ裏」

うつむと唸り、王子に忠告。

「殿下が裏面を出していただかないと、」

「ああ、すまない」

立場を考えれば宰相の命に従うことも、謝ることもしなくていいはずなのに。

だがヒューは、主人のこんなところは、割合気に入っている。

「えー、ベネット王子、聖女アーマントウルド様と結婚も間近かの面でもよろしゅうござりますか」

「もっと反応の仕方があるだろう。ま、そうだ」

「で」

「で、じゃない！ 題字だけ読んでどうする！ 中身も朗読するの

だ！」

「ええー？ はい、じゃあ」

ヒューは主人のこういった、くだらないことに関する吃驚するくらいの熱中度は、割合歓迎していない。

「えー、『シスター・アーマントウルドにより盲た目を治癒されたベネット王子が、当シスターに求婚したのは皆様周知の事実だろう。城ではこの事実を評して、当シスターを聖女として表彰する動きもあるようであり』……。ああつまり、こんなに市井でロリコンだって言われておられるってことですよ、嘆かわしい……。『筆者はそれ以降も城下での王子の動向を追っていた。王子はこの一週間、当シスターのいる教会に欠かさず足を運んでいた。彼の方の今

までの慈愛にあふれた正義の協定や慈善活動からもお分かりの通り、彼の愛は常人より深くあられる』……政治関係者がいるのですか？ このピラ会社。酷く作為的な媚の売りようですね。表面とは大違
い」

「ヒュー、脱線するな！」

「……。はい」

主人の「おおっぴらに公開されていいものか迷う方との」恋愛経過をわざわざ聞くのを嫌がる僕（しもべ）の気持ちは、過剰な突っ込みをもつてもご理解いただけないらしい。

「『そしてこれは速報だ。今朝もまたファインデイヤ教会を訪れたベネット王子は、なかなか是と言わない当シスターに焦れて、再びの求婚を申し出た。筆者も感動で手が震えている。当シスターは、確かに首を縦に振られていた。』」

「うんうん」

「『アーマントウルードの名の王妃が誕生するのも間近か？ 先日の号で彼女がまごうことなき聖女であることと、家柄はともかく、祖父母について述べたことを覚えておられるだろうか。彼女ほど正妃になるべき方はいない！ 万歳！』 殿下……これは……」

目出度いことでございますね、と続けようとしたヒュー。さてはこれが原因の二つめか。

「ああ、真ではない」

「は！？」

王子は愉快げに、事も無げに言う。

「私が今日政務を放って教会に行き、求婚したのは事実。しかしアーマントウルードは是とはしなかった」

「ではこの記事は」

「過剰な演出か、もしくは記者の見間違いだらう」

「はあん。どうもこの記事を書いた者は殿下とシスターを神聖視しすぎていますよ」

これが彼の真の上機嫌の理由だったのか。

なんとまあ質の悪い。

「だが、おかげで外堀は完全に埋まった。これで民衆は、ファインデイルーのアーマントウルドを見続けるだろう。過剰にな」

作為を働いたと見るには、余りにも晴れやかな顔であった。

確かに、調べた限り、教会を愛して、義理堅く、寡黙な彼女である。自分が王妃候補とされることで、教会が衆目に当てられることに罪悪感を感じるかもしれない。

なまじ王子から二回も求婚を受けたことがバレてしまった。もしこれで嘘だと訴えても「聖女」の一件でファインデイルーは注目を浴び続け、断れば王子の求婚を無下にした不敬な女がいる教会と、ぶしつけな目にさらされることは確実だ。

「上機嫌の理由はこれですか」

「これでアーマントウルドにとって一番いい解決策は、私の元に來ることになったろう？ …… お前のおかげだなヒュー」

ヒューは片眉を上げた。

「なにをおっしゃる」

「ハハハッ！ 照れるな。お前が世間にアーマントウルドを聖女とするよう働きかけたのは分かっているぞ。見くびられては困る」

「して、どのような方法では分かっていますか？」

「そこまで言うと、少しばかり上機嫌が収まった。」

「そこまでは……。だが、そうだろう？」

「ええ、まあ……」

「やはり！ おお我が友ヒューよ！」

嬉しさが募ったか、王子は宰相を抱き締めた。

抱き締めた？ 否、絞め技だ。キまっています。おい間接キまっていますよそんなハグが世界のどこにあるというのです我が主人

「のおおおお」

「ハッハッハッ、普段は人を人とも思わないように思えるが、やはりお前は良いやつだな！」

「うむむむむむむむ」

「いやあなかなかどうして、良かった良かった大安泰。」
そんななんどうでも良いのです。いいんですか、私死にますよ。意識遠のいてきましたよ。

「お前も直に会ってみるといいぞー。顔は地味だがさっぱりした顔つきが可憐でなあ……とても理知的なんだ、ハッハッハ。私に対してのあの目はすごいぞ！ 小さい時のお前をゆうに越すな、あの哀れみ具合！ 冷徹具合！ デジャブを感じるぞハッハッハ」
「なあと言われましても……ぎやあああギブギブギブ」

こ、この野郎、絶対に根に持ってやがる。

口は回るが体力はそんなに無いうえ、一応は王子に「死ぬ」と言われれば死ななければならぬ宰相は、そろそろ目の前の景色が怪しくなってきた。

ちなみに、どこぞの王子が幼少のみぎりから少女に叱られたい、その少女を近くに侍らしたいという願望がついたのには、こんな過去が関係している。

幼い頃、どこぞの宰相は理知的な少女のような容姿であった。

彼はどこぞの王子の数少ない遊び相手であり、ことあるごとに王子をそれとなく馬鹿にしていた。

しかし王子はすっかり彼を女だと思っていたから、女なのになんとすばらしい豪胆さだ、とむしろそれを好ましく感じていて、成長していくうちに、といっても一年後だが……やっと豪快な王子でも、宰相は男だったと気づいたのだった。

そして気付いた時には既に人格形成は済み、根深い嗜好と根深いトラウマが、某王子の心に根深く根づいてしまったわけである。
哀れかもしれない。

例え王族であっても、一般にそうそう叶えるのが難しいだろうどこぞの王子のご趣味。であるから、王族としては異例の三十まで独身、という事態が続いた。

アーマントウルド教は王族の多妻も側室も認めない。

そうしてる間にも、ついには彼は盲てしまった。自分の身をおして慈善に励む哀れを誘うどこぞの王子を見て、やっと原因になったどこぞの宰相は反省した。

反省して、自分の倫理観には反するけれど、できるだけ王子が恋をしたら、それを後押ししてやろう、と。

多少、噂長の町人を雇ったりだとか。

ビラ配りの会社にリークしたりだとか。

彼自身王子の話を聞いて驚いた。あのビラ会社がアーマントウルドと王子を後押しする記事を書いていたことについて、だ。しかも虚偽記載までとは。

筆者は雇って駄賃をやった奴輩だろうか。ヒューが願い出たのは、あくまで主人と釣り合うようにと「聖女説」を広めることだけ。

しかし大なり小なり、裏工作情報操作、そんな物騒なものが大得意な宰相がいたから、今日びのアーマントウルド捕獲作戦は成功したというのに。

「いいだだだだだだだだ」

「ハーツハツハ、しかしアーマントウルドは引つ込み思案であるからな、明日も一応教会へ行ってやろうじゃないか。指輪を携えてなあ！」

そんな罪滅ぼしの意識、解っているのかこの主人は。言わなきゃ分からない類の人では無かるうに。

あ、けれどどこぞの某はどこぞの某であつて、この哀れな泡吹き策略宰相と美形の傍若無人殿下とは限らないですからね、ここは重要ですよ、ええ。

おい我が主よ、どれだけ根深い恨みといつても頸動脈を押さえ続けたりしたらですね　……。

あえなく宰相ヒュー・オーガス「チチエスターは、がくりと頂垂れ、主には「軟弱だなあ」などと言われながら失神した。

落ちる寸前に彼は決めた。

もう二度と協力しねえ。

王子が上機嫌の高笑いを浮かべていた時刻から少し後、真昼時より太陽がいくらかずれた頃合いだが、アーマントウルドは一人教会の寮に引きこもって、布団を被り丸まっていた。

厚い布の中でさえ幻聴が聴こえる。

『聖女様ー！』

『シスター、僕の足も治してくれえー』

『王妃様ー！ ご尊顔をー！』

『聖女様！ お布施はいくらでも積みますからどうかこの子をお助けください……！』

アーマントウルドは自らの腕に爪を立てた。

再び頭の中では教会にいた時の光景がまざまざと蘇る。

お願い、どうか私を頼らないで。

アーマントウルドは教会の窓辺に張り付かんばかりに押し寄せ、人々にそう言いたかった。

もしかしたら偶然かもしれない、少しばかり奇跡が使えただけの、ただの無力で無慈悲な娘が私だ。

全てはあの紙切れのせいだ。

思い出しただけでも腹が立つ　目にした途端あんなもの、破り捨てたに決まっている。

結婚に頷いただと？　何をおっしゃる！　天地がひっくり返ってもありえない。あんな男とよくも！

そもそもアーマントウルドは、自分が聖女と持て囃されてはじめてた時点から、神の罰なのだと思っていた。

始まりは王子に対して発動した件の己の聖痕に始まる。

アーマントウルードはそれまで、聖痕持ちでこの家系とはいえ、祖母のように奇跡を起こしたためしなど無かった。

神に個人の許しをこうたのもあれがはじめてであったから辻褃は合う。

だが、アーマントウルードはこの奇跡を、身のほど知らずの己に對する神からの罰なのだと思った。他人の不幸せを神に問いただした立場を弁えないアーマントウルードへの、罰なのだと。

敬虔深いアーマントウルードは、教義でもないのに日に三回、教会で祈りを捧げるのが日課であったが、今自分が動けばまた教会に迷惑がかかると分かっていた。

一時の気まぐれのせいで、今のアーマントウルードの居場所はこししかない。

否、こししかないと言うのは違う。

はた。アーマントウルードはあることに気付いた。

被っていた布もはね除けて、修道服から素足が覗くのも関係無いとばかりに、ベッドから飛び降りる。

旧礼拝堂ならここから誰にも見られずに行ける。

アーマントウルードはせめて、神への謝罪を考えた。

アーマントウルードは当事者ではないが、イバライドではかつて、魔王と呼ばれた者がいた。

イバライドの隣国の王であった彼《氷王》は、悪魔と王妃が通じ出来た子供であると真しやかに囁かれている。

彼は当時、今もだが、夢物語とされた『召喚術』を操ることができた。

彼は少数で各国の神殿や教会に潜り込み、密かに穢れた儀式を行い、その場を地獄の出入り口にした。

氷王は自らの父親の体を代償に史書に残る主だった悪魔達と契約

し、その出入口から支配下の悪魔の大群を呼んで、世界を阿鼻叫喚の渦に巻き込み…………。

あとはアーマントウルードの祖母がどうにかした、と人に伝え聞く。祖母はこのことを詳しく話さないので伝え聞く話がどの程度本当なのかは定かではない。

そもそも氷王というのは謚で、その実名を言うのも穢らわしい、祟りがあるなどと言われているあたりが疑わしい。

けれど当時の教会《旧教会と俗に言う》は、一度穢れてしまった事実を重く見て、触るのも修復するのも穢らわしいと言わんばかりに放置され、イバライドではどの教会も新たに教会《新教会》を建築している。

そんな中でファインデイラー教会は、穢れなかった数少ない教会の一つだった。

しかし当時、戦後の周りの教会の状況から、祖父は魔王によって荒らされた国土と神々へ喪に服し、このファインデイラー教会もまた新たに教会を立てたという話は、司祭の孫娘という理由でよく聞かされたので、当時の教会が穢れてしまったのは事実なのだろうと認識していた。

つまり他の旧教会ならいざ知らず、ファインデイラー旧教会には何の落ち度も穢れも無い。

アーマントウルードはだから閃いた。

ファインデイラーの新教会はここから離れているが、旧教会なら、運良く寮とは雑木林を隔てただけの場所にある。

雑木林のおかげで早々周りには気づかれにくい。

同室の修女は未だ教会で仕事をしているだろう。

アーマントウルードは彼女に向けて一枚の伝言を残し、旧教会へ歩き出す。

ほんの散歩のようなつもりで。

『シスター・レベツカへ』

私は祈りを捧げに旧教会に行つて参ります。

なるべくはやく帰りますが、レベツカが戻るまでに帰っていないか
つたら、恐らくまたあの記者達に取り囲まれているものとお考え下
さい。

迷惑はかけたくありませんので、遅れた場合はどうか内密にいた
して。

きっと私は自力で脱出いたします。』

放置されていただけあつて、雑木林には得体の知れない虫や漆のような草までもが繁っている。

その奥にある、漆喰の剥がれ具合も嘆かわしい建物こそが、元フラインディラー教会。

だというのに、その前に待ち受けるの天使達の彫像が一片たりとも削れていないことは、人々から忘れ去られ、有象無象の教会と共に打ち捨てられたこの旧教会に、神がいまだご加護を注いでいる証だろう、とアーマントウルドは思った。最後に手入れされてから半世紀以上は経過しているだろうに、アーマントウルドにそんな考えを抱かせるほど、仄かな笑みを浮かべる神の使いは奇跡的に輝かしいままだ。

旧教会の扉は何処へか消え去り、アーチ型の入口を入ると、その中身はちゃんと整備さえすれば、新教会と寸分違わぬ設計だろうということが予測できた。

神の絵が描かれていたであろう色ガラスは崩れて、アーマントウルドの足下に散らばっている。

天井近くに打ち付けてあったものが床に落ちたものと思われる、斜めに傾き、壁にもたれるよう立て掛けられただけのおざなりな十字架に近づき、アーマントウルドは俯いた顔を上げて報いた。

アーマントウルド教のイバライド国教会は、聖職者の婚姻を認めている。

けれどアーマントウルドは生涯清らかな身でいたい。

アーマントウルド教のイバライド国教会の第一位、今のベネデア大主教は、王妹ナフタライ殿下。

つまり王子の誘いを断ることは、大主教の親族を軽んじること

も繋がる。

私はどうしたらいいのだろうか。教会に迷惑をかけられない。もしかしたら、破門という自体にも繋がる。

イバライドのみならずこの近隣諸国において破門とは、「人では無い」と見なされ、何をされても訴えられないぐらいの立場に追いやられることだ。

それはいけない。

「……どうか」

アーマントウルドは十字架にすがり付いた。

「どうかご慈悲を」

力のかける場所を誤ったか、はたまた彼女の願いを取り下げる無情の現れか。

十字架はずりりとアーマントウルドのほうへ倒れこんだ。

神の娘のアーマントウルドの顔は下にふせられた。彼女の胸に打たれた杭を模したものが、アーマントウルドの腿を圧迫する。

アーマントウルドは物悲しい気持ちに襲われ、地に膝をついた。

これ以上どうしたらこの国で平穏に暮らせようか。

ああ、いつそのこと他国に逃げてしまえれば。

だがイバライドに逆らえるアーマントウルド教徒国などありはしない。王子が王となり、権力を持てば破門とされることもあり得る。たとえ、他国の地にしよう。

所詮は無駄だということか。十字架の立て掛けられていた場所には、十字架の重みによつてか、小さな四角い窪みが出来ていた。

床は木だから、半世紀も重しを乗せていたとしたら、こうなってしまうのも無理は無い。……と見ていると、アーマントウルドは十字架が斜めに立っていた理由を発見した。

ステンドグラスのガラス片。無数に散らばっていたあれが、十字架のあった箇所の下、この窪みの右端にあったのだ。

アーマントウルドは首を傾げた。

こんな重いものに耐えかねて床さえ沈んだというのに、どうして

ガラスのような脆いものが潰れずにそこにある？

色は透明に近く、ひび割れで白いにごりを持ち、まるで薄氷のようだ。

アーマントウルードの子供らしい手のひらと同じぐらいの大きさで、特に何も考えぬまま、アーマントウルードは十字架を抱き抱えたまま手を伸ばし、それを拾い上げる。

利き腕の右手で。

「っあ！」

軽く手のひらに包んだ途端、アーマントウルードはパツとそれを離した。

熱い。

ガラス片は一瞬にして火が吹いたかと思うほど熱くなった。

反対に、この既視感にアーマントウルードの心は冷えきった。

まるで。これはまるで王子に触れた時のような。

放り投げた破片から目が離せない。

……カタカタカタカタ、カタカタカタカタ……。

それは人為的には無く自発的に揺れているように見える。

アーマントウルードは十字架を抛り所にせんとばかりに、ひしと更に抱きしめた。

「ひっ……」

アーマントウルードは怯えの声を上げる。

震えていたガラス片が、ついには青白い焰を上げた。

ガラスを握ってから火柱が立つまでもの十数秒だろう。アーマントウルードはもちろん逃げることを考えて腰ごと後ずさったが、

「いや」

青白い火柱から伸びた腕に右腕を捕まれ、逆に引き込まれる。

火柱に入ったと同時に、火はふつとかき消えた。

アーマントウルードはあまり家族以外の男に近づかれた試しは無く、強いて言えば、朝に王子に肩を捕まれたのが少ない人生の中で最も男という生き物に近づいた時だったが、焰の中にいた少年に引

き寄せられて逃げないよう腰を掴まれている現状を思えば、あれはまだ生易しい事態だったのかもしれない。

そう、彼はほんの少年だった。

青白い焰と同じ色合いの髪と瞳を持った、アーマントウルドより少しばかり歳かさ程度に見える、しかしなにも身に纏っていない少年。

「うっ、エ」

ジャパッ。

アーマントウルドは込み上げる吐き気を抑えること叶わず、間近な少年に吐瀉物をつけてしまいながら吐いた。

「エげほ、げ、けほ」

どうしたことだろう。流石に年端もいかない子供には、吐き気が来ることは無かったはずなのに。

彼はアーマントウルドの腰にあてていた手を、するりと背中まで移動し軽く叩いた。

「平気？」

「っふ」

たとえ優しく労られようとも、聖痕で人の形になったものだ。

アーマントウルドは体を強張らせた。

「どうしたの、いつもの覇気がないじゃない。それに背、ちょっと縮んだんじゃない？」

「いつ、も……？」

アーマントウルドには教会関係者と家族以外に、親しい男性などいるはずがない。

「こんな修道院みたいな服着るからそんなふうになるんだよー？」

もしかしてあの男に着せられたの？ いい趣味してるよねー」

「あの、あなたは……？」

「アハッ！ やだな。なにいつてるのナターシャ……」

少年はアーマントウルードの瞳をまじまじ見て、そして固まった。
「何 きみ、ナターシャじゃないの？」

「もしや、この人ならざるとしか思えない少年は。」

「ナターシャは……祖母の名です」

「祖母。……」

いい趣味をしている男の話をしてからずっと嘲笑いを崩さなかった少年は、アーマントウルードの言葉にみるみる萎んだ。

「ねえ、じゃあ君は？」

「……孫娘です」

名前を聞かれたのは分かっていた。しかしあえてそれをそらした。仮にもし彼が伝え聞くように「名前を教えるはならない者」の血をひいているとしたら。

「孫娘？ へえ、そっくりだ。目の色だけちがうんだ。ねえ、おばあちゃんは元気なの？」

「……元気です」

「元気なのか。そっかあ。」

刹那の間があった。

破顔した少年が息を吸いこんだ瞬間、瞬時に入れ替わる表情に、アーマントウルードは萎縮する。

「で、ぼく（・・・）を封印した勇者さまは幸せに幸せにくらしましたってか！?! ア、アアいい身分だなナターシャあああッ！
!？」

ああ、悪魔がいる。

遠い東の国から伝わる鬼のようなその表情に、アーマントウルードは涙を流した。

私はなんて、愚かなことを。

私はなんて、取り返しのつかないことを。

「ふう。ちょっとスッキリした。でもいつまでも裸なものなんかヤ

「だなあ。なんか布……あ、カーテンがある」

少年はひとしきり絶叫したあと、見た目相応の顔つきに戻った。

彼は手元に所有するアーマントウルードに、無邪気な微笑みを浮かべる。

「ね、きみも聖痕持ちなんだね」

アーマントウルードは答えない。

「聖痕持ちってことは、きつとみんなに期待されたり、頼られたりしてるでしょ？ ナターシャみたいにああ」

やはりアーマントウルードは答えない。

代わりに少年に質問をした。

「……あなたは、誰ですか」

「ぼく？ ぼくねえ」

可愛らしく小首を傾げる。

「肩書きがありません。まずアサクランドの王さまでしょ？ 悪魔との不義の子でしょ？ 親殺しでしょ？ 世間では勝手に死んだものとして氷王なんても言われてたし」

指折り数えて、五つ目の指を折り曲げる時の彼は、祖母と同等の老獪さを伺わせた。

「自分で周りに呼ばせてるのは 魔王、だけどね」

06 かつて楽師が伝えた名

その日の朝は、不思議なことに、全てのイバライド国民が明朝に目覚めた。

明けきらぬ空には、まだ月もある頃合いだ。

各々川に行き、泉に行き、盥に水を張り……。そして全ての国民は、それぞれの用事で水場に赴いた。

ベネット王子もまた、水場を通りすぎた一人だった。

ファインディラーへ早朝から馬車を飛ばす、という最近の日課を果たさんがため庭に降り、アーマントウルドに会う手前、歯や髪や顔に乱れが無いが、噴水の水面で最終チェックしている最中、それは起きた。

ユラユラとした水面の揺れが、ヴンと音を立てて平らになり。

ベネットが顔を映している部分だけ、四角に切り取られるように静止する。

次にその部分に映し出されたのはベネットの顔では無く、水色の陰りを放つ銀色。強いて言えば雪や氷の色をした髪と目を持った、愛らしい顔つきの少年の顔だった。

それは「まるで奇跡のように」。

イバライドには魔法など存在しないから、まさしくそれは奇跡に見えた。

「な!？」

当然王子は驚き、水面に顔を近づける。

水面が少年の発する声に内側から揺らいた。

「おはようっ！ イバライドの皆さん。見えますかあ？ 聞こえますかあ？」

少年はこちら 画面の向こうに向けて手を振った。

笑顔を浮かべる少年は、特に誰かの反応を確かめる仕草も無く、まあいいか、と呟いて映し出される範囲から退いた。

その奥から代わりに現れた少女は、ベネットのよく知る娘だった。

「……アーマントウルード!?」

前のめるあまり彼の鼻が水面の四角の部分に当たったが、画面に変化は無い。

彼の愛するアーマントウルードは布で猿轡をかまされ、椅子に座っていた。

彼女の膝の上に乗るのは、歯を剥き出しにしてベネットに笑いかけているかのような、三つ目の異形の白銀の狐。

兎の目をした可愛い狐は、今にも頭から彼女を飲み込んでもおかしくない。

「どういうことだ!」

憤っているベネットはアーマントウルードの顔をその鼻で歪めた。ハツとして顔を起こす。彼女の顔を自らの鼻で抉ったと思ったからだ。しかし落ち着いて観察しても、どう見ても彼女の目にベネットの姿は入っていない。彼女の目の前にはいるはずのあの少年の姿すら映さない。

黒い睫毛、碧の眼、それに被さる、横に長く落ち着いて見える目元、細い鼻筋、幼さの残る口元、解れて前に被さる亜麻色の髪。離れてよく見たところで、寸分の狂いもなく、彼女はアーマントウルード。

「えー、ここに一人のシスターちゃんがいらっしゃいまーあす」

先程より強い音の波を放ち、画面にいない少年の声が水中から響く。

パンツと手を叩く声が聞こえ、彼女の腿の上の狐が牙を剥いた。

「アーマントウルード……!!」

ベネットは噛みつかんばかりに水中の狐を鷲掴む。手のひらから溢れた水は、ただの水としてすり抜ける。

幸い、牙は彼女の服の袖を捕らえ、無理の無い範囲でベネットにもよく見えるように、聖痕のある右手の平を返しただけだった。

ベネットはほっとすると同時に、不思議に思った。

芯の強いアーマントウルド。両手が自由であるのに、なぜ抵抗しないのか？

『はい！ このとおり。この子の右手には聖痕がありまーす。どうやらイバライドの子らしいんですけど、聖痕持ちってことはきつと有名人だよねえ。みんな知ってるのかなあ？』

知らないはずがない。

ベネット王子は言わずもがな、アーマントウルドの顔は先日街中に配られたピラに挿絵として載っていたし、大々的に広められた影響で、「奇跡」欲しさにファインデラーに押し寄せたので、確実に、少なくとも王都の民衆は大抵あの顔を覚えているだろう。

政務のための城から、微かに“知ってる”と言い合いざわめく声が聞こえた。

(……もしかや……これは別の場所でも見えているのか……？)

少年は「イバライドのみんな」と言った。みんなとはどの程度のもんなのか。周囲からのざわめきはやはり、この現象は他の人間も見えているのだと肯定するもので。

王子は危惧した。

(まさか、言葉通りイバライド中の者がこれを……？)

そんなことを考えている合間に、少年が再びアーマントウルドを覆い隠すように画面にせりだしてきた。

『ところで、みんなぼくの顔は知ってるー？』

「邪魔だ！」

ベネット王子の食らいつく声は彼に届かない。

王子は彼の声を不快に感じていた。子供にしては悪質な、粘着質な笑いを含んだ声。

少年の、イバライド国民というより、むしろ王子以外の「特定の誰か」に話しかけているようなこの表情、仕草、全てが勘に障った。「ね、ぼくの顔が広まっていたのは何十年も前らしいから、今の人たちは知らないだろうけど、知ってる人は何人残っているのかなあ？」

彼はそのまま、特徴的な薄氷に似た色合いの瞳を動かさず、笑いながらこちらを見ている。

『知っているなら言ってみて。ぼくの名前を』

「……？」

明後日には三十路の大台、しかしまだ何とか年若いといえる年頃であるにも関わらず、王族であるベネットには、彼の容貌に思い当たる節があった。

今や肖像画の存在しない、正しくはかつての肖像画を国民に燃やされた隣国の王の容貌。目の見えなくなった王子を唯一楽しませてくれた旅の楽師は、ありありと彼の耳にそれを伝えてくれた。

それは目の見えたところに歴史で教師と本に学んだ、子供じみた伝承　氷でできた肌、三目の顔に長い舌の、小さな悪魔の息子

とはかけ離れた、なんとも現実味のある、魅力的な、物語の主役で悲劇の英雄。

『今日あなた様だけにお披露目しますは、はて、むかしのような昨日のような、そのくらいの時代です。舞台は知るものは思いつくのも嫌う国。それこそはこの隣にある国……あつた国、でございます。そこに君臨する王は、薄氷のような色合いの、なんとも愛らしい姿かたちの……』

この少年はベネットの好みを省いて言えば、愛らしいという他にどう形容すべきなのか、という笑顔を浮かべていて。

見れば見るほど気持ちを冷やす、背筋の氷るその笑顔は、狂った旅の楽師の話を呼び起こさせて。

(そつだ)

あの時、牢屋で死を待つ彼は、最期の最期に狂った奇術師の顔で、王子を呼び寄せた。

『では、これも王子様だけにお教えしましょう。だって、この王国の者がその名を知らないなんて、なんとまあナンセンス。なんとまあ、不愉快極まりない。ならせめて、いずれ国を担うあなた様ぐらいは。あの方の名を聞いた時、無礼の無いようにしなければならぬのです。それこそが今生での私の使命、でございます』
『さあ王子様、怖がらないで！ 老い先短い哀れな咎人の遺言に、使える耳を閉じないでくださいませ。どうぞよく覚えておいでなさい。氷の笑みしか浮かべないあの方の真の名は ……』

「ロロ」

あまり聞きなれない、異国風の響き。

ベネットが吐息と変わらぬ声でそれを呟くと、少年のあの氷の笑みが、より一層……かつての旅の楽師がした奇術師の笑みが如くつり上がった。

『誰かがぼくの名を言った』

少年 氷王、魔王、幾多の名を持つ「ロロ」は、今度はイバライドのベネット王子を確実にその目に捕らえて言った。

『おや、案外若いやつが言ったんだ ねえ君、この女の子を助けたいかい？』

07 かつての勇者に伝える宣告

「も、」

勿論だ。アーマントウルードという少女は、ベネットの命にも代えがたい。

しかし言いかけた言葉は、台詞にもならなかった。目の前の更なる信じられない光景、いわば奇跡を見て、彼の舌は言語能力を奪われた。

全ての五感を復活した眼球に集結した。集結すべき時だった。

噴水に写し出された少年の顔がだんだんと大きくなるどころか、水自体 否、そこだけが氷となった噴水の池の水が少年の輪郭を形取り、氷の凍る硬質な音を響かせながら、完全に一人の人間を氷の中に閉じ込めた氷柱が、そこに現れた。

氷の中で少年が瞬く。

すると融解もせずに、ただのガラスの如くひび割れて、少年を閉じ込めていた氷は欠片となって噴水へと落ちた。

そうすれば、ただの可愛らしい少年が水面を立っている。それだけになる。

少年とベネットとの間には、水上と地上という決定的な狭間がある。だが少年は沈まない。そのままベネットの元へと、歩く所を器用に凍らせて、あたかも水上を歩く聖人が如く歩み寄ってくる。

ベネットはただ、見つめていた。

見つめながら、この少年を、「口口」を、殺すべきだと思った。

アーマントウルードを拐ったから？ おかしな奇跡を見せたから？ 違う、そんな理由じゃない。

これは人の世にはいけないと、全うな人の子である彼だから

思っただけだ。

そして彼の思ったことは、ことこの地においては正しい行いで、

「正義」となる。

一種の強迫観念だ。

殺さなければ……殺さなければ……殺される。

彼はこれに剣が効くのだろうか。そう考えながら、

「あれ」

躊躇い無くその心臓を刺した。

「……………」

ベネットは表情を変えない。

代わりに、むしろ笑顔しか分からないのか、そう思わせるほど恐ろしい笑みを浮かべ続ける刺された口は、相も変わらず微笑んだ。

「ごめんねえ、ぼく普通の心臓なんて、もうないの」

ベネットは恐ろしさを感じながら、ああそうだろうな。と言った。

有名な話だ。

魔王には心臓が無い。

父親を殺したことに良心の呵責を感じずにはいられなかった魔王は、そんな人間の思いは邪魔だからと、それを悪魔の心臓と交換したので、彼は不死身となりました。

歴史ではここまでしか習わないが、童話だともう一文が足されている。

彼は心臓を心と置いていたのもう安心と悪いことをたくさんしましたが、心臓と心はべつの物です。魔王はせつかく人の心臓をとったのに、痛い痛い、胸をかきむしることも多かったです。勇者はそれを見て、魔王の弱点は心とつきとめました。

ただしどの本においても、「そして勇者はどうやって魔王を倒し

たか」は、神のみぞ知る、で終わってしまつ。

「呪いが解けたと思つたからてつきりナターシャがうっかり呟いたかと思つただけで、まさか男とわねえ」

「口は平然と剣を引き抜き、どこからそんな力が出るのか、そのままベネットの手から剣を奪い、氷漬けにして、石畳に放り投げた。剣は粉々に砕け散つた。

「はじめましてありがとう。君はどこのお家の子かな？ 神官？

歴史学者？ いや違うな、いかにもな冠つけてるし……んー？ ああ、そつか。王族にも神の娘の血が入っているんだっけ。だからぼくの力もそこそこ復活！ ぐらいにしかなくてないのかあ。で、君は誰？」

「……名は言わん」

「つれなあい」

ベネットは今の口口の言葉で頭が混乱しそうになつた。

自分の血筋には神の娘の孫の血が入っている。それはとうに知っている。

それがどうして奴の力の解放に繋がる？ 悪魔に会つたら命を握られるから、自ら名を教えるはならないという通説が頭を過り、咄嗟に名は秘したが、名を他人に答えて貰い力を取り戻す悪魔など聞いたことがない。

それに なぜ神の娘の血が関係あるのだ？

「それはねえ。ぼくを封印した奴が、神の娘の血を引く奴だったからだよ？」

「……！！」

「心を読まれた!？」

「アハ。別に読んだわけじゃないから安心してよ。長いこと生きてると、それぐらいの察しはつくもの。ま、大半は寝てたけどね。」

「私を愚弄しているのか!？」

「うん。してる。あのシスターちゃんにも多分、てか絶対流れてる

んだけどさあ、ぼくから教えて言わせると意味無いんだよね。あの魔法。良かったー君が知っててくれてー」

「貴様どこまでツ!!!」

愚かにも、ベネットは何も柄物が無いからと、口口に素手で殴りかかるうとした。

「シスターちゃんのことだけど」

その言葉に制止する。

そっだ、自分のプライドより、彼女を。

「　彼女をどうする気だ」

「物わがりのいい子は嫌いじゃないよ。王子様。ああじゃあ、君はどうしたい」

「彼女に触れるな。話しかけるな、一つも傷をつけるな、傷つけるな、汚すな、解放しろ」

そう答えると、驚いた、と口口は言った。

「そーんなにあの子ってば重要人物なんだねえ。いい子を人質に取ったな、ぼく」

ここで、ただベネットだけに大切なシスターなのだ打ち明けたら、この魔王はどうするのだろうか。

状況は好転するか暗転するか……。

「だからこんなに必死なんだ」

考えた拳句、今言うべきことでは無いと結論づけた。

早く解放してほしい。だが、きつと長丁場になるだろう。そんな予感がした。

「お前の条件はなんだ」

「まだ飲むとは言ってないよ。身の程しらずの王子様」

「まだ本調子じゃなく、誰とも知らぬ者の元へ交渉をしに行こうと立てこもるぐらいだ、そちらにもそれなりの希望があるのだから……」

言ってる合間に、再び彼と少年との間合いは開いた。

言い終わる頃には、口口は後ろ跳びで噴水の水面に戻っていて、少し高い位置からベネットを見下している。

「まあ良かったよ、ぼくの名を呼んでくれたのが王子様で」

「消える気が……彼女はッ！！」

「必死だねえ。君つてば、そこまでしてあの娘が欲しいんだあ
「なッ！」

「そういうのムカつくけど、ぼくは優しいからね」

フフ、とまた狂気の笑みが狂喜に歪んだ。

異形の空想の似顔絵にも勝るとも劣らない禍々しさを漂わせる顔
が、そのまま氷っていく。

「ならばぼくのナターシャを寄越せ……いや、」

彼はダメだな、これじゃ簡単すぎてつまらないものと言った。

「そうだね。こうしよう。 ナターシャの屍をぼくに寄越せ」

どす黒くどこも見えていない瞳 あれは死人の目だった。

そのまま水中へと戻りながら、口口は念を押した。

「ぼくの条件はただのこれだけさ。……いい返事を期待してるよ、
王子様……」

そして消えた。

08 かつて勇者と呼ばれた老婆

今朝、イバライド国民は誰しもが起き出した。それは彼女、年老了いたナターシャ・エイデンとて例外ではない。

ナターシャはどうしてか今朝に限って、庭の手入れより洗顔を優先した。

盥に汲んだ水には、彼女には見知った子供の顔があり、彼女は慌ててダイニングに盥を持ったまま向かい、

『誰かが僕の名を言った』

盥の中に映る彼と、彼女の孫娘は、その言葉を終わりに盥から姿を消した。

「ア、アーマントウルドが、アーマントウルドが……」

「あなた誰なの！？ ちょっと、聞いてるの！？ 何が目的だっていうの！?!」

盥の中は叩いても乱しても、ただの水しか入っていない。

示し合わせたかのようにダイニングに集結していたナターシャの家族は、一様に取り乱していた。

この中には、かつて彼と対峙したナターシャを除いて、誰も彼が誰なのかを分かる人間はいなかった。

あれが私の倒した魔王だと言って、誰がそれを信じるかしら。…

…ナターシャは思い、すぐ考えを消した。

真実を教え、むやみに家族をこれ以上混乱させるのも気が退けると。

だがそれは、彼女の杞憂に過ぎない考えである。

なにせ彼女と違って、彼は彼女が最後に彼を瞳に写した時、かつてそのままの外見で、あの盥の中にいたのだ。彼が六十を超え、更にはナターシャより二歳も年上だなんて、誰が信じるというのか。

同年代の人々でも、彼の顔を直接見た人間は少ない。しかも、そんな大昔の人間の顔を、今でも覚えている人は限られているだろう。ナターシャはそんな当たり前のことに頭が回らないほど、この突然にふってわいた事件に、そうとは悟られない顔でとり乱していた。

(間違いなく氷王に違いない。いいえ、でも、あの時に彼の悪魔の力は封じて、それから破壊したはずよ、じゃなかったらあんな無抵抗に私に倒されるなんてあり得ないじゃない)

当時十四歳だった娘にしては卑怯な手段で魔王の力を奪い、無力になった彼をこの手で粉碎した……。

ナターシャはこの五十余年間、ずっとそう思って生きてきた。なるべく、はやく忘れたい記憶だとも思って生きていた。

だが彼は水面を媒介にして自分の姿を写す、悪魔の力を借りたことをやってのけていたから、悪魔を使役できているのは疑うべくもなく、彼の姿を知る誰かが、もしかしたら彼女の孫娘のように生き写しの顔立ちを持つ誰かが、騙りや復讐のためにあんなことをしかけたとナターシャは思いたかったが、瞼に浮かぶ昔の彼と今さつき盥に浮かんだ彼の姿が重なった。

アーマントウールドの膝に乗っていた狐のような物体をも、ナターシャはよく知っていた。

魔狐と言われるキメラのヘルワイ。魔王口口にしか彼にしか忠誠を誓わないようにできている、禍々しい生き物。

(材料は確か、悪魔の角と悪魔の血、狐一匹、契約者の心の欠片……)

あれを従えているなら、彼は間違いなく魔王口口、その人だ。ナターシャは彼とかつて話したことを思い出す。

『わっ……え!?! それどうなってるの!?!』
『何が?』

『だってそのキメラ、今君の胸から出てきて……え？ え？』
『これはね、新しく作った魔狐のヘルワイちゃん。可愛いでしょ可愛いでしょ？ 胸から出てきたのは、この子はぼくの心と契約して心を住処にしてるからさ。ね、ヘルワイちゃん。二人にご挨拶！』
『め、メス？』
あ、ってことは心つてやっぱり胸にある、で間違いないのかしら？』

『んー、みたいだね。その確認もかねてこの子を作ったわけなんだけどさ。ついでに欠片と言わず全部心食べてくれればいいのにい』
『懲りないわよね君も……。言いながら何よソレ、鼻の下伸びきっちゃって。悪いけど私にはあんまり可愛くは見えないんだけど。…

…あらマルキウス？ どうしたのよ、顔真つ青よ？』

『ままた君はキメラなんて神に背いたものモノをしかも歯とんがりすすすぎぎ、ひいっ！ 歯が！ 歯が鋭利ッ！』

『マ、マルキウス……。それはさすがに脅えすぎよ……。』

『二人ともなんでこの可愛さが分かんないかなあ！ キメラって面白いよ？ 材料通りに作っても、材料の元が違つと全然別の毛並や色や、耳の形、ちよつとした所が違くなるんだから。血で契約するとぼくの親戚でもいいみたいで、浮気性なキメラになつちゃうんだよね。その点、心の欠片で契約すると本当にぼくにしかなくなつからないし、どこにでも呼び出せるし……。』

……あの頃は、こんな会話が彼を倒す切欠になるとは、露ほども思いはしなかったが。

ナターシャはあの時、実を言えば、ロロにとどめをさせなかった。本来であれば、彼を叩きくずして、粒子にまでしなくてはいけないかったのに、欠片をいくらか残したところで泣き崩れてしまったのだ。今は亡き夫に代わりにとどめを刺してくれと酷いことを頼んで、勇者を放棄した。

もしかしたら優しい彼のこと、ロロの体の欠片を砕かずにいたの

かもしれない。だとしても故人である彼の人を、ナターシャは責められない。元は自分の責任なのだから。

ああしかし、それでもナターシャはできるかぎり、常人なら全く生き返れないような状態までには彼を痛め付けたのに。

今まで彼が姿を表さなかつたところを見ると、ナターシャによって魔王を封印できていたのは確かだろう。だが彼は復活してしまつた。

復活した彼の手元に置かれた人質はよりにもよって、アーマントウルード。聖痕を持つナターシャの孫。

息子の話では、アーマントウルードは王子の目を癒して見せたらしい。

アーマントウルードの力に対する考察として、ナターシャは一つの仮説を立てた。

きつとアーマントウルードの手には、癒しや復活の奇跡を起こす力がある。どういう経緯からか、アーマントウルードは魔王の欠片を手に入れ、右手によって彼を復活させてしまったと見るのが妥当だろう。加えて誘拐されていた所を見ると、アーマントウルードの手には攻撃する力は無いと見た。

悪いことを良いようにしかできない奇跡の力が癒しの力だなんて、孫は恵まれている。誰も傷つけることが無い。

ナターシャの知る復活の奇跡を使える聖人達でも、大きくても爪ほどにしか無い、硝子のようにさせられた人間の欠片から、人を常人にまで復活させるなんて不可能だろう。伝説の神の娘アーマントウルードでさえ、自らの遺体から復活を遂げたぐらいだ。

それでも魔王は、復活を遂げられたのか？

それはアーマントウルードがナターシャ以上に神に愛された娘ということか、魔王に流れる悪魔の血と悪魔の心臓は人の常識の限りでは無い、ということか。

封印したはずの召喚術によって与えられた魔力でさえも彼は持ち合わせて復活していたのは、アーマントウルードの手の力はそこま

で及ぶということだろうか。

誰かがぼくの名を言った、と呟いたから、まだ完全に回復したとは言っていないのだろうが、ナターシャの使った力は魔王と違い血に関係する。もし呟いたのがナターシャの血縁であれば、ナターシャが自ら封印を解除しにかかったと封印が勘違いを起こしてしまうから、完全には行かないが、更に魔王に力が戻ってしまっただろう。

ナターシャは頭を抱えた。

その横で、彼女の家族は不安のあまり、関係の無い言い争いをはじめていた。

やれあの娘を修士にするのは反対だったとか。やれあなたと結婚したからあんな厄介な痣ができてしまったのよとか。

ナターシャはそれらを頭に入れないよう極力努めた。

幸運なことに、ひつつめた頭を抱える老婆の姿というのは、誰が見ても不自然な光景では無い。

(誰が彼の名を言ったのかしら。そもそも、誰が彼の名を知っているというのかしら)

考えるナターシャ。

ロ口という名を知ってるということは、自分と同じく年老いた人間が、ボケに襲われつい呟いてしまったのだろうか。アーマントウルドは人質だから論外、家族はこの場でナターシャと共にいたから違う。

まだ血の繋がりの無い人間がロ口と呟いた可能性はある。そうすれば何も問題は無い。そうあって欲しいと願う。

もしも彼がまた世界を怨み世界を怖そうとするなら、またあの時代に逆戻りになってしまう。

ナターシャはどうせ自分は老い先短い身だと思っているので、彼の矛先が自分に来るのは構わないとさえ思っている。だが昔の自分

と良く似た孫娘が、悪魔の力が復活した彼の側にいるとなると、話は別だ。

人質としてアーマントウルドを手元に置き、魔王がナターシャの代わりとして彼女を痛め付けないとは言えない。をなぜならナターシャは、彼にひどいことをした。

正しいと胸を張って言える。でも、酷いことをしたから。

ナターシャはさんざん考えて考えて、未だ口論の終わらないダイニングで、できる限り背筋を伸ばして、すっくと席を立つ。

ある決心を持って。

「母さん、聞いてたか？ こいつときたらな」

「ドン、お母さん今からしばらく出掛けてくるわね。鍵、お願いできるかしら」

「……お義母さん？」

彼が本物の魔王だとしても、昔魔王と対決するにあたり生まれたコネの人物や共闘者達も、今では同じく老いぼれているだろう。夫と同じく死んでいてもおかしくない。

そんな中で、果たしてどこまでできるだろうか。ナターシャは協力者がいないと、割合都合が悪い。

この歳になり、最近は歩いても膝が上手く連動しないくらいだし、一人でやれるとは思えないが、やれる所までやるしかないだろう。

この平穏な時代、ナターシャの力は不必要だった。

けれど魔王がいる時代には、ナターシャの力は充分、年老いた今もなお、使えるはずだ。

食卓に色を添える、昨日摘まれた白いバラの一輪挿し。

ナターシャはそれに向かって念じる。

これはもう新しい薔薇に取って変わられた不必要なもの。

花びらの端が茶色く変色している。後はただ腐り落ちる、そ

れだけのもの。

今私が壊したほうが都合のいい物体。

ナターシャは右手で薔薇に触れる。

薔薇は一瞬で変質した。氷るように、しかし音も鳴らさず、一瞬にして精巧なガラス細工に。

持ち上げても、質量は元と変わらず軽く、いとも簡単に割れそうな、精巧な白薔薇のガラス細工。

ナターシャ、またドナルドも、アビゲイルも、孫達もそれを見て、未だ彼女の左手が機能していることを確信する。

「母さん、もしかして……」

「荷物纏めるの、手伝ってくれるかしら？ ドナルド」

「あ、……ああ」

ドナルドは年老いた母親が何をしに行こうとしてるのが察したが、止めようとはしなかった。

自分の知る限り、この年老いた母親をおいて、誘拐犯から娘を救ってくれる人間に心当たりは無かったから。ドナルドは割合、安易である。

アビゲイルは目を見張っている。

ナターシャは勇者だと聞いていたが、彼女の使う奇跡がこのようなものだ、アビーは知らなかったのだ。同時に、このような力を母親に使わせて王子からアーマントウルドを救い出させようと画策していた夫を、どこか恐ろしく感じた。

ナターシャの左手に宿る奇跡。

それは悪いものを、良いように 脆くし、破壊できる力。

アーマントウルドの癒しを与える力とは正反対の力だった。

荷造りを済ませた老婆である母を見送るドナルドの心境は、義理の娘である妻より軽い。

玄関で二人の子供を抱き立ち尽くす妻アビーと異なり、母の勇姿が見られるのだとむしろ喜び勇んだ夫ドナルド。彼は今母と二人、庭から少し離れた納屋の後ろに広がる森を前に、最後の手伝いをしている所だ。

「さつき、アビーも見送りに行きたいみたいな顔をしていたんだけど、あいつ来ないつもりだと思う？」

「こんな状況で、しかも私の奇跡に驚いて泣いてる孫を放って、アビーまで目を離したら可哀想よ。あとねドナルド。あれは名残惜しい目じゃなく私に脅えている目だったわよ。アビーにも奇跡は初めて見せたんだから、まあ、驚かれても仕方ないといえそうだけどねえ……。といつかね、夫婦なんだから妻の顔で心を見る術くらい覚えておかないと苦労するわよ」

「脅えてたか？ よいせ、と。俺には、単に泣きそうな顔にしか見えなかったけどな」

「ロープは足りるかしら」

「余りそうなくらいだよ。馬用の紐だからかな」

「ぐるぐるに巻き付けてくれていいわ。道中長いしねえ」

ロバにトランクを巻き付ける作業は、意外に骨が折れる。なぜリユックではなぜダメなのかと聞いたら、燃えやすいからだと言う。

引き摺る使用のトランクに母から頼まれドナルドが詰め込んだのは、当座の着替えと食料、ドナルドが手慰みに使っている弓矢一式、どこに隠していたのかなか蓄えられた路銀に、後は息子のドナルドも見たことの無い、ガラス瓶に入った摩訶不思議な液体や粉末しかしそれらを詰め込んでもトランクにはまだ隙間があるので、口

バの身にも負担は少ないだろうと想像できる。

母自身も、普段のいかにも老人用のネズミ色のエプロンドレスという格好では無い。動きやすさからかブーツに長いズボンにチュニツク、さすがに鎧は体に堪えるからか、紋様が刻まれた皮の防護服をその上に着て、まだ買ったばかりの若いロバに股がり、ロバの背中の中の定位置からトランクがずれないようにと固定している。腰を痛めるからと、鞍の上にはクッションを重ねて敷いている。

紐を巻き終わり、仕上げにトランクを叩いて揺らして、ナターシヤは満足そうに言った。

「落ちなさそうねえ。これならきつと平気だわ」

「もう行くんだよな。母さん」

「ええ。遅くなったら困るしね」

「あれそういえば、アーマントウルドがどこにいるか分かるのかい？」

「ええ大丈夫よ。さっきの盥の光景には……ちょっと心当たりがあったから」

「やっぱり母さんは凄いなあ。さすが勇者だなあ」

そうだろうとは思っていたが、一応の確実な言葉を聞けて、ドナルドは救われる思いだった。

やはり勇者である母に頼って間違いは無い、昨日王子のことで直談判しようと思家に戻って正解だった。

ついでにあの幼女趣味なイカれ王子もあの力で粉碎してくれれば願ったり叶ったりなのだが……。

などと邪な欲望を持って忌々しげな顔をついしていたドナルドに気づいたのか、それとも母としての勘か。

「んん、っ」

「ハッ」

ナターシャは咳払い一つでドナルドを夢想の世界から呼び戻す。

「なんだよ母さん……俺は……別に……何も……」

「なあに？ お母さんは元、勇者よドン」

「ああ、なんだそつちか。細かいなあ気にするなよ」

「細かいくないわよ。　　そうだ。ちよつと心配なのがね。目的地自体は分かるんだけど、行く手段を見つけないのが大変だから、すぐにアーマントウルドを見つけられるかは分からないのよ。私も頑張れるだけ頑張るけど、そこは肝に命じておいて欲しいの」

「そういえば母は昔から、地図が読めない人間だった、とドナルドは思い出す。

「行く場所はどこなんだ？　俺地図見るの得意だし、一緒に行くのは無理だけど探すくらいは出来ると思う」

「それは言えない」

なぜ、と口に出す暇を与えずナターシャは息子に告げた。

「それからねえ、これもよく聞いて。これからは、軽々しく私や家族や誘拐犯に関する目的や答えを口にしてはダメよ。悪魔は言質を取るのが上手いから」

「悪魔だつて？」

話の流れとは関係無かった、どこから出てきたのかいきなりな物騒な単語に、ドナルドは首をかしげて、それからすぐに青ざめた。

盥に現れた、世に言う奇跡のような諸行。盥の向こう側にいる見たこともない生き物。

そこから導かれる誘拐犯の正体に、ドナルドは早くも行き着きかける。

「もしかして……。アーマントウルドを誘拐したのは……」

「喋ってはダメよ」

青ざめた息子に、ロバの上から小柄な母は制する。

それは即ち、ドナルドの問いの答えとなった。

「良いドナルド。私は誘拐犯の名前を知っているけれど決して口に出さないわ。アビーなら構わないけど……もし万が一、あなたや孫達が彼の名を知ったり、彼があなた達の前に現れても、彼に関する言葉を口にしないこと。私の血縁者が下手に悪魔に名前を取られたりすると色々和不味いのよ。高位な悪魔は言葉で契約を交わすから言葉で彼等に聞かれることは、とても危険なことなの。念には念を入れて、私と魔王の話も、誘拐犯の話も、悪魔の話も……自分の名前も、誰と言わず、これらになるべく話さないでちょうだいね。位の高い悪魔や魔物には、人に化けるのが上手い者もいるから、油断ならないの。どうしてもという時には、筆談で済ませなさい」

「それって……まさか、アーマントウルドが誘拐されたのは、魔王が」

「ほらそれよ」

忠告した側からの失言に、老婆は小さい頭を抱える。

「ね？　そういうちょっとした言葉でも、あなたは気を付けないといけないの。ほら、ドンはあの人に似たのかうっかりやさんだし、孫達もダメね。まだ小さいからうっかり喋るかもしれないし」

「う、ごめん」

「家では誘拐犯としか相手を呼ばないようにして、寝言でうっかり名なんて呟かないように誘拐犯の資料も探さないようにしたらいいわ。家族みんなだね。知らない人が来たら注意することよ。約束できるかしら」

「で、できるわ」

ドナルドは顔色の悪いままでわたわたとしながら、どうにもナターシャには心許ない声で答えた。

「……ドンは緊張すると、頭が追いつかなくなっちゃうものね……。難しければ、私のことや誘拐のことで知らない誰かに何か問い詰められたら、どんな相手でも口を開かないようにして。家族の中でもあれの正体を知られないようにしたらいいと思うわ」

「あ、ああ」

「……。それぐらいかしらねえ。何か質問あるかしら」
そう聞かれて質問する内容は既に決まっていた。

「あのさ、それで、母さんはいつ頃家に戻るつもりなんだ？ 俺が鍵ずつと預かっていたら失くすかもしれないし、大まかな時期だけでも知りたいんだけど」

母が帰る前には預かった鍵で家を開けないといけないと思って帰る頃合いを問いかけるドナルドに、

「まあ」

一瞬面食らったような表情をしたナターシャだが、途端にしわくちやの笑みで答えて。

「……帰れたら、アーマントウルドと一緒に最初に貴方達の家の方に行くわ。その時に返してちょうだいな。だから時期なんて気にしないでちょうだい。わざわざ実家に来るのも手間でしょ？」

「？ ああ、まあ。楽だからそれでいいならいいけど……」

「ありがとう気にしてくれて。あなたは本当に良い子ね、ドン」
ナターシャの寂しげな笑みに腑に落ちないものはあったが、ドナルドは笑い返して、誉め言葉に胸を張った。

ドナルドはとにかく単純な男である。

「あら、やだわ、言っている間にもうすっかりお昼じゃないの」

確かに諸々の準備の間に、日は真上に高く昇っている。朝が早かったせいで寝たり無いのか、母に釣られて空を見ると、日が黄色がかって見えた。

「もうそろそろ行かなきゃいけないし、良い。言ったことは絶対守るのよ」

「分かったって。俺だって勇者の母さんの息子だよ。ま、気を付けて行ってきてくれよ母さん」

「貴方もね」

ドナルドは「帰れたら」と希望的観測で答えた母の心情も意味も

理解せず、実に気楽に口バで去る母の背中を見送った。

ドナルドにとって母は何にも負けない英雄で、端から彼女が負けて帰る想像はちらとも思い浮かんでいないのだ。

母は勇者なのだから。勇者は悪を倒すものだ。必ず悪に勝利するものだ。

小さい頃から腕っぷしが強いことぐらいいしか取り柄の無い自分が唯一の取り柄を使って善行をすると、周りから「さすが英雄の子」と誉められた。大したことでもなくても誉められるそれが、彼の誇りになった。

ドナルドはこの歳になつてなお、心の拠り所として偶像としてのナターシャという英雄を信奉しているのだ。

それから三十分は過ぎただろうか？

いやに長い時間影もとうに消えた母の見送りをして、やっと満足したドナルドは、納屋を越えて庭を横切る途中、はたと、母のいない間はこの庭はどうするんだろうと考え、立ち止まる。

アビー、アビゲイルと話すのは、朝に少しアーマントウールドのことで言い争って、気まずい気持ちもある。

だから庭の手入れなんか頼む勇氣は出ないし、そもそも彼女は母の手前は家事のできる女と威張りたい良い格好しいだが、彼女はどこそこの娯楽小説から抜け出たように貴族らしくなく天真爛漫で、それでいて家事には見事にフォークより重いものは持ったことがないという、一般的な雑事に関しては貴族らしく不器用極まりない。ドナルドも力ばかり強くて、とても剪定のような繊細な作業など出来ない。第一ドナルド達の家からここまで来るのには馬車を使い付けなくてはならないから、子供の学校も仕事もあるし、まず無理な相談だろう。

「しばらく庭師を雇うしかないか。…ん、でもそんなに長いこと退治に時間かかるのか？ 母さんは」

ドナルドの脳内の戦闘におけるナターシャは、実際に勇姿を見たことがないせいもあり、触った側から物人問わず粉々にする、謂わば破壊神の形に近い。

「二日……いや、遠い場所だったら一週間はそれでもかかるかな」
ぼやつと空を向いて一人言を呟いていた能天気極まりないドナルドは、突如何かが押し寄せせるを耳に捉える。

ドダドダダ、とどこどころパカラツと軽快なリズムがより集まった地響き。

「っ」

ビク、と脅えを見せて、彼は即座に後ろを振り向いた。

近づけば近づくほど、音の成分を理解できた。足元に僅かに遅れて伝わる振動を感じながらドナルドは思う。

この地響きはナターシャのロバのように馬力も振動も少ないものとは全く違い、集団の汗馬が寄り集まって起こす、只者じゃない、地面さえもこれ程までに地震のように揺り動かす蹄の音の羅列だ。

そして姿を表したのは、なんて高そうな馬。高そうな銀のフルアーマー。高潔なサーコートは誰が見てもイバライド国旗を模したものと知れる、青と灰色のストライプ地に、アーマントワールドの化身である黄金の鷹が羽ばたいてる柄だ。

剪定され栄養行き届いた薔薇が生い茂っているのが数少ない美点である、かつての勇者の家にしてはこじんまりに過ぎる庭の入り口を囲うように整列した、そのいかにも精鋭といった風体の軍隊は、のべ五十人。真ん中にいる一際大きなフルアーマーの人物を倣って一挙に静まり返る。

八割方彼等の目的は母か娘だろうとは分かるが、今彼等の目の前

にはドナルドしかない。

ドナルドはこのド迫力の威圧感に叫んで逃げたしたくなる。

ドナルドの実家には薔薇のアーチや生け垣はあれど、軍隊に対抗できる立派な門など無い。

ぽかんと口を開けたままそれを凝視して、母に救いを求めようとしたが、だがしかし、ドナルドは母を大分前に見送りしていたのだ。た。

まさかおめおめ嫁に助けを呼ぶわけにも行かない。妻の前ではこのドナルドも、いっぱしの男なのだ。

挙動不審のドナルドは、諦めて彼等と対峙することを決意した。

冷や汗を垂らして彼等に向かい合ったドナルドの表情から覚悟を読み取ったのか、フルアーマーの軍隊の中心、つまりドナルドの視線の先に位置する男が、胄を上へ引き上げる。

「突然失礼する。ここは元勇者、ナターシャ・エイデン様のお宅で間違いないか」

そこから見えた顔は、先ほど盥で見た可愛らしい少年とも、肖像画で見かける忌々しい美形の王子とも異なった。

胄の中でいささかうざったそうに一房だけ鼻にかかり落ちている金髪は、忌々しい王子と違ってドナルドの鼻につくほど輝かしく無いし赤くもないし、その目は黒い。鼻だけはやけに高いが、全体的に顔立ちが濃すぎる印象はあれど、忌々しい王子や誘拐犯もとい魔王とも違って気後れするような美しい顔では無く、剃りきれないのかうつすら青い髭がいつそ残念な外見にすら思える。そもそもあの二人と比べるにはガタイがあまりに良すぎる男であることを今さら確認して、ドナルドは結論付ける。

……要するに彼は、ドナルドとは面識の無い人間だ、と。

彼は返事の無いドナルドをじっと見て、勝手に「どうやら間違いないようだ」と後ろに控える者達に抜かし、それからまたドナルド

を見た。

「我らは輝けるイバライド王国第一師団である！ 私は師団長のホイリー・ホーゼント。この度、長年の功績を讃え、元勇者ナターシヤ殿には新たな勲章が国王陛下より与えられることとなった。我らは元勇者ナターシヤ殿を城まで護衛し、送り届ける任をベネット殿下直々に与えられた者である！ ご親族の方とお見受けする。どうぞ、元勇者ナターシヤ殿をここに呼んでいただこう！」

力強く誇り高い声に続き、ドナルドにも見えない軍隊の後方からはラツパと太鼓のおめでたい音が鳴り、彼が言い終わると母に向けてか師団長に向けてか判断しかねる大喝采が辺りに響き渡る。

ドナルドは暫く棒立ちしていたが、熟考した結果、

「……」

輝かしいイバライド王国第一師団の面々に、ただ頭を横に振ることでだけで答えたのだった。

出立したのは昼を回らない時間帯で、今は日の沈む一歩手前になる。

ただでさえ冬は夜の足が速い。そしてその薄暗がりの中、ナターシャは寒さに震えながら、住処があるセルスタング地方バーセスから、西隣のレンチエスター領近くへとかかる石橋の前にいた。

レンチエスター領には、港町エルバーがある。

領内に入ってもエルバーは遠い。隣国とはいえ海を隔てたかつての魔王の支配域、アサツクランド地方は更に遠い。

ナターシャの脳内予定では今日中にはレンチエスター領に入ってそこで夜を過ごし、休み無くエルバーまで駆けるはずだった。

ナターシャにはゆったりしている暇などない。

陸路でもアサツクランドに行けないことは無いが、船で渡った方がよほど近い。何より、ナターシャには、エルバーを故郷とする仲間がいた。他の協力者は散り散りになり、今の居所は定かでは無いが、彼なら今もあの町にいる可能性が高い。それを思えば、港町からの移動が上策に思えた。

ダメで元々、ナターシャはエルバーにて、かつての仲間を救う旅の誘いをかけに行こうと思っていたのだ。

今も領内に入れずにいる現状から、これらが机上の空論であったことは明らかではあるが。ナターシャは当初、そう思っていた。

ナターシャは腰の痛みに耐えきれず、ロバを既に降りていた。

「あいたたたた……」

老人らしい呻き声を上げながら腰を曲げ、ロバの背に手を預けて涙目になっている姿は、とてもとても、たとえ「元」にせよ、勇者

とはかけ離れている。

(はぁ……)

ナターシャは声に出さず、息に出さず、自らに呆れた溜め息を吐いた。

(私ったら、……つくづく、考えなしだったわよねえ……)

全く、計画性が無い。

「昔であればこれぐらいの距離一晩で駆け抜けられた」という自負。「まだ若いもんには負けてない」といういかにもな老人根性。それらが我を通した結果がこれだ。

拳句、息子夫婦にかっこつけてお供も頼まなかったのは浅はかだった。

こんな季節に、しかもこんなよぼよぼのロバで、よぼよぼの乗り手を使い、よくもバカ力でならした若い頃のように行くと思えたものだ。

(そうよ、今日はちょっと考え無しにもほどが有るわよ)

(「おばあちゃん勇者だから、こんなことできるのよ」って自慢してみたかったからって、左手を使うことは無かったのよ。口があるんだから、「アーマントウルドを助けに行くわ」って言って、もし引き留めてくれたら使うとか、あったじゃないの。……ドンはああ言ってたけど、アビーにはどん退かれたし……)

ナターシャはアビゲイルの顔を思い出して、今度は口から盛大な溜め息を吐いた。

ロバの上で走っている時には、キラキラとした若作りな気迫に圧されて出てこれなかった、本来の現在のナターシャの鬱々とした思

い達。これらは身体を痛めながら立ち往生している間に、一つ一つ塞き止められなくなっていた。

（そりゃあアビーも退くわよね。顔つきとかもね、絶対シリアステイストになっていたものね。きつとダークヒーローな感じになっちやったわよねえ）

（はあああ、腰は痛いし、お尻も陥没しそうに痛むし……。砂利道がこんなにキツイものとは思わなかったわ。……。寄る年波には勝てないのかしら……）

あの時間に出立したのには、なんとなく今家を出るべきという「元勇者の勘」が働いたからなのだが、大抵現役時代はそれに従って外れたことは無いのだが、それにしても、用意と考えが甘過ぎた。

田舎真っ只中の渓谷にかかる石橋には、ナターシャ以外全く人が通らない。老人の一人旅でも、追いつきの心配も必要なさそうな田舎である。

それならいつそここで野宿か。

「あの、もーし！ おばあさん！」

そんな考えが脳裏を過った時、天の声か石橋の向こう側から響いた。

痛めた腰を叩いていた手を止め、ナターシャはハッとそちらに目を向ける。

「そんなところで、どうかされましたかー？」

遠目ながら、言葉をかける彼は、遅しそうな青年に見えた。

人が居た！ その事実嬉しさのあまり無意識に十字を切ったナ

ターシャは、少したじろいだ青年に向かって、張りの無い喉から、それでも懸命に叫んで答える。

「腰が痛くてー、ロバが引けないものでー、ちょっと、立ち往生をしてるんですー」

「ああ、……ちょっと待つててくださいー！」

「あらっ」

青年は、ナターシャの話に、ナターシャのいる石橋の反対側まで小走りにやって来てくれた。

「あらあらわざわざ、まあー」

「大丈夫ですか？　ここいらは夜中には誰も人が来ないしな……」

漆黒の髪と目に、少し色黒の肌の、美形と言うより愛嬌のあるどんぐり眼の青年は、言いながら人好きのする顔で笑った。

慌てて来たためだろう。彼の汗に仄かに独特の甘臭い香りを感じて、ナターシャは反射的に眉をしかめた。

(……)

香水ともまた違う、一歩間違えれば嫌な臭気になりかねないような、人を誘惑する香り。

(あら、魔物ね)

「おばあさん？」

「あら、いえね……そうなんですよ。ここで小一時間立ち往生してたんですが、誰も周りを通らなくて……」

「確かにこりやあ重そうだ。あー、橋の先までで良いなら、ロバ、俺が運んであげましょうか」

「あらあらいいですよそんなわざわざ、ッ……」

「遠慮はいいつスよ。辛いでしょ？　あ、もし平気ならおばあさんは手綱を握って、これで、ロバに引っ張って貰ったらどうですか」

(……)。どうしましょ)

ナターシャは考えた。

匂いからすると、彼はインキュバスの可能性が高い。

(淫魔つて、夢の中以外では案外無害で、下級だしねえ……)

中には、本当に人間が大好きな魔物だっているのだし、昔の仲間にも魔物はいたのだし……。他に人も通らなそうな場所で折角の親切を不意にするのは不粋だろう。

ナターシャはさりげなくとっていた構えを取って、眉を戻した。

(魔物だからって、差別はいけないわよねえ)

「ありがとうございます」

確かにもう一回ロバに跨がるような体力は無い。ナターシャは手綱を握って、ゆっくり歩くロバに引き摺られるようにして歩いた。すると、

「あら、ずいぶん楽ですよ」

元のロバを引いているのが青年であるためか、ほとんど力をかけずに歩ける。

「でも、ちよつと足がおぼつかなくないような……腰がなあ。おばあさん、杖とか持ってないの？」

「今まであんまり遠出なんかはしなかったものだから……」

「歩き回るなら後で杖を作ってもらったほうがいいっすよ。ここいらは辺鄙だからあんま店無いけど、街中に行けばそれぐらいの店はあるし。ま、ちよいと遠いけど」

「そうですねえ」

魔物ということ置いてみても、今時珍しいくらい親切な青年だ、

とナターシャは感心する。

(この気の利かせ方、ドンに爪の垢飲ませてやりたいわ……)

ほわほわと浮かぶのは、愛想があるのか無いのか分からない、口も笑むのか歪んでいるのか分からない、いかにも「微妙」な表情を浮かべている息子のいつもの顔である。

「痛」

「ああ、すいません！ やっぱ歩きは辛いつスか」

ロバの歩くステップが少しずれ、ロバにつられて腰の痛みが一瞬振り返したナターシャに、青年はこう話した。

「腰も辛いだろうし、あれだ。いつそ背負いませよつか」

「へ？ やだ、いいええ、そこまでは……」

「平気平気。うちにも一匹ばばあ……、じゃない、おばあさんくらいの奴がいるから、背負うのなんて慣れてるよ」

「本当に、お気持ちだけで……」

(……。ばばあ？)

この親切ぶりからは、老人を「ばばあ」呼ばわりする子には見えないのだが。

というかインキュバスが、老人と同居。……ナターシャは少し違和感を感じた。

そんな会話をしている間に、石橋の終わりが見えてきた。

「そついやおばあさん、今夜はどこに泊まるんスか？」

「ああ……ええと、街中に宿屋があったら、借りるつもりだったん

ですけど」

「あーあーダメダメ！ こんな時間じゃあ、うちの街じゃあ宿屋なんか満杯になってるよ！」

「あ……あらそう？」

随分と語気の荒くなった彼に気圧されたナターシャが、「それじゃあ困ったわね」と続けると、

「そうだろ！？ このまんまじゃ野宿になっちまうかも……。それにもし宿屋まで行くとしたって、そこまで歩くのだっておばあさんの足じゃあ大変だろうが、じゃない大変でしょう？」

「え、ええ」

「そうだ。どうせならこれも何かの縁だし、俺ん家に泊まりに来たら？」

「え」

「俺ん家ならここから近いし、使っていない部屋もあるしさ」

「まあそんな」

「よし決まりだな！ じゃ、ロバは俺の家に誘導するから」

「え、……あれまあ」

親切と言つには、強引すぎるような。

(! まさか、私を獲物にしようとか考えているんじゃない)

ナターシャは手綱を握る、鶏ガラに近い自らの腕を見て、無い無い。とその考えに突っ込む。

インキュバスが好むのは、精気のおふれる人間のはずだ。

(普通に考えてこんなおばあちゃんをを食料にするわけがないわよね。単なる親切かしら)

と、なれば。

(……お言葉に甘えちゃっていいわよね？ 別に、同居人がもし人喰い悪魔だったりしたって、その時は壊せばいいだけだしねえ) 非常に気楽な結論になる。

「ここだよ」

辿り着いた案内された彼の家は、既に明かりが点いているし、煙突から煙も出ている。

外観はナターシャの自宅より古い上に、蔦の巻き付いた風体で、いかにも魔物の巣窟だ。

「……」

「ボロいでしょ」

「……立派なお宅だと思いますよ」

「お世辞はいいつつスいいつつ。立て付け悪いから鍵もかけられないような家なんですよ」

彼は投げやりにドアを開ける。

「帰ったぞー、ババアー」

そう言うつやいなや、空中にお玉が舞った。

「痛だッ」

「ババアー言うなつつとるだろうが!!!!」

汚い言葉を返した女性は、ナターシャほどでは無いにしろ、初老であった。彼女が「ばばあ」なのだろう。老人らしからぬ露出度の衣服にエプロンをつけて、キッチンの前に立っていた。

「るっせえな見えねえのか客いんだよ！ ちったあ世間体考えろや糞つたれババア！！」

「まだ糞垂らすほどおちぶれてねーわよアアン!!!? 客だあ!?!」

どうやら彼女はスープを煮込んでいたがらしい。

「火い消すからちよつと待ちな」

(すごい家庭ね……)

ナターシャはただただ目の前の出来事に呆然としていたが、うっかり良い年をして挨拶もまだしていなかったと、慌てて前へ出た。

「あの、今晩は」

「あん？」

「ええと、はじめまして。……実はですねえ、彼に立ち往生してるところを助けていただきまして、今晩泊めていただくというお話になったのですが……」

「あ、そう」

彼女はナターシャより少し年若い。五十半ばを過ぎたくらいだろうか。髪はまだ全て黒く、赤い服も、彼女から気だるげな色気が溢れているからか、見苦しくはない。いわゆる、熟女、というやつだ。

「アンタが、泊まり客だつて？」

ナターシャを視界にきちんと入れると、彼女は力一杯目を見開いて言った。

「トウイ、あんたこの人泊める気なのかい」

「そうだつつつてんだろ」

「婆さんじゃないか、なんでまた、」

言葉は一瞬途切れて、彼女は眉をしかめて一歩下がる。

まるでこの青年を魔物だと認識した時のナターシャのように。

「……いや、この匂いは……」

「ごちゃごちゃうるせーな！ 余計なことあいいから、さっさと飯用意しろよ！ なんのために生きてんだバーカ！」

「いい加減でめえ何様だクソガキが!!」

呆気にとられているナターシャが、なにかしら、と思う間もなく、
ずずいっと彼女が至近距離にいた。

「あんた」

正直、初対面なのに随分図々しい人だなとナターシャは思う。
彼女からもごく薄く、甘い香りが漂っている。

「あの……?」

「名前は」

「は、ああ、……」

ナターシャは口ごもった。

魔王が復活した今、易々と自分の名を口にしていいものなのだろうか。

目の前の彼女はそんなナターシャに向かって、

「ナターシャだろ」

と告げた。

顔は不快げに歪んでいる。

「……え?」

「お互い随分年食っちゃったが、匂いは変わらんもんだねえ……」

彼女は、ナターシャがナターシャであるを知っている。

「あなた……」

黒髪で、色気がある女の知り合いなんて、ナターシャにはそ

ういない。

『勇者の癖に色気づくなんてバツカじゃないのぉ！ あたし、あたしは、……ッ絶対認めないんだからねえー！！』

それで思い浮かぶのは、甘ったるい語尾の、夫になついていた、途中でパーティを抜けた、一体のサキユバス。

口調も外見も変わっているけど、まさか。

「あなた、リリーア……？」

「よく分かったね」

「あなた、なんで……」

「それより！」

昔から感情の起伏が激しかった彼女は、キッと睨んでナターシャに叫ぶ。

「アンタね、なにのこのこと夫ほっぴり出して、こんな阿呆に着いてきてんだよー！！」

「……えっ……と……」

この状況で素直に、「夫はもう死んだ」と言っているいいものなのだろうか。

ナターシャは冷や汗を垂らした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3495q/>

かつて恋した君に

2011年9月30日03時19分発行